

令和元年6月28日現在

機関番号：83101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16944

研究課題名(和文) 東アジアにおける土器出現の背景の多様性解明にむけた国際比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Archaeology to Elucidate the Diverse Backgrounds of the Emergence of Pottery in East Asia

研究代表者

橋詰 潤 (Hashizume, Jun)

新潟県立歴史博物館・その他部局等・研究員

研究者番号：60593952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本列島とアムール川下流は、最古級の土器出現地域に含まれる。土器を利用した多様な資源利用行動は、寒暖の振幅が繰り返された更新世末の不安定な環境下で生み出された。本研究はこうした行動が出現した背景の共通性と個性を、比較考古学的手法で解明することを目指した。特に、データが最も充実した日本列島と、石器などの類似を指摘されてきたアムール下流との比較を重視した。日露共同調査によって蓄積してきたデータの整理・分析結果を報告書にまとめ、日本列島との比較を行った。両地域では類似より相違が目立ち、わずかな類似を有しながらもそれぞれ個性的な環境への適応の結果、それぞれの土器を含む考古文化が生じたと推定できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアでは多数の地域で、他の地域を大きくさかのぼる年代に土器の出現が確認されている。本研究は日本列島とアムール下流を中心に比較をおこない、土器を用いた多角的な資源利用の背景にどのような共通性と個性があるのかを検討した。両地には石器形態など一部類似も認められるが、詳細なデータ比較によって相違の大きさが明らかとなった。本研究によって、従来土器という共通性の強調によって見えにくくなっていた、世界各地の多様な環境や資源に応じた、人類による周辺環境への多様な適応行動の地域事例を提示することができた。こうした研究視点は、現代にも引き継がれている文化や伝統の多様性の起源解明にもつながるものと期待できる。

研究成果の概要(英文)：Some of the earliest pottery to have ever been found has been unearthed on the Japanese archipelago and lower Amur river basin. These are important regions for studies on the human responses to paleoenvironmental changes in the transition from the Pleistocene era to the beginning of Holocene era. This study examines the human behavior determined from the artifacts found in the Incipient Jomon (Japan) and the Oshipovka culture complex (Far eastern Russia). In particular, it shares the results of a joint Japanese-Russian research project at the four Oshipovka culture sites (Goncharka 1 site, Novotroitskoe 10 site, and the Oshinovaya Rechika 10 and 12 sites). This study expands our understanding of substantial human changes during the terminal Pleistocene to early Holocene eras. Moreover, it also depicts human behavior and activities that are highly correlated with the concomitant paleoenvironmental changes which transpired during this time.

研究分野：先史考古学

キーワード：出現期土器 環境適応 オシポフカ文化 縄文時代草創期 更新世/完新世移行期 比較考古学 日本列島 アムール川下流

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の動向：かつて、西アジアと考えられていた最古の土器の出現地は、神奈川県夏島貝塚出土試料の9000年前を超える年代測定値により転機を迎えた。その後、アムール川下流域を皮切りに、更新世末期の土器が東アジア各地で発見された。こうして更新世末期まで遡る土器は、日本列島を含めた東アジアに広く認められる、当該期の特徴的な考古学的現象と捉えられるようになった。さらに近年、古環境研究データの高精度化と、年代測定技術の向上により、考古遺跡や出土試料と古環境がかつてない精度で対比されている。こうした研究により、更新世末期に不安定な寒冷期から、現在に続く安定した温暖期へと急激な環境変動が生じたことが復元されている。そして、環境変動に対する人類のユニークな適応行動を示す顕著な事例として、東アジアにおける土器出現期は重要な研究対象と位置づけられるようになってきている。中でもアムール川下流域は、日本列島の資料との類似要素が指摘されてきたことから、日本人研究者の注目を特に引き、両地域間の比較研究が試みられてきた。

(2) 研究着想の背景：ロシア連邦アムール川下流域に分布するオシポフカ文化は、更新世に遡る土器や、石斧、大形両面加工尖頭器などの共通点から、日本列島の土器の起源とも目されてきた。しかし、現状では日本列島の土器の起源を周辺地域に求めるには証拠が僅少である。現段階では根拠に乏しい伝播による説明は一旦保留し、各地域の土器出現の背景を探るために、まずは各地域における当該期人類の行動を復元するためのデータを蓄積する必要があるとの認識に至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、東アジアにおける特徴的な考古学的現象として注目されている、更新世末期に遡る土器の出現を対象とする。土器出現の背景をロシア連邦アムール川下流域と日本列島の遺跡事例から復元し地域間比較することによって、更新世末期の環境変動に対する人類の適応行動の多様性の解明を試みる。申請者は2001年以来、日露共同調査を進めると共に、日本国内での遺跡事例の分析を進め、本研究課題の前提となるデータを蓄積してきた。本研究課題の推進によって、比較研究の前提となる考古誌（調査報告書）の整備、刊行を行い、両地域における当該期人類の環境変動に対する適応行動の特殊性と、地域をこえた共通性の解明を目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 2001年度から2015年度まで日露共同で調査を行ってきた、ゴンチャルカ1遺跡、ノヴォトroitsコエ10遺跡、オシノヴァヤレーチカ10遺跡、オシノヴァヤレーチカ12遺跡の調査成果の整理と分析を行いデータを整備し、研究報告書として刊行を行う。

(2) 日本列島における晩氷期前半の温暖期相当の基準資料として、新潟県小瀬ヶ沢洞窟出土石器の整理、分析を行う。

(3) 日本列島における晩氷期後半の寒冷期あるいは冷涼乾燥期相当の基準資料として、新潟

県室谷洞窟遺跡下層出土石器の整理、分析を行う。

(4) 日本列島内の縄文草創期遺跡出土石器および周辺地域(サハリン、北海道、青森、福井など)での資料調査をおこない、各地の共通性と個性の抽出を行う。

(5) 上記の分析結果をもとにアムール川下流域と日本列島における更新世末期の人類行動の共通性と差異の抽出を行う。検討の結果は本研究最終年度に刊行する研究報告書に反映させる。

(6) 日本列島およびアムール川下流域の特徴について検討するため、周辺地域の研究成果との比較検討の機会を設ける。具体的には、アムール川中流域、中国北東部、北海道、さらに当該地域の土器、年代研究を推進してきた研究者による事例の報告と、報告者間での討論を行う場を設け、当該地域における人類の環境への適応行動の共通性と多様性を明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) 2016年度は、基礎資料の整理と分析など上記課題の解明に向けた基礎的な作業を重視して研究を進めた。具体的には、アムール川下流域のオシノヴァヤレーチカ10遺跡とノヴォトロイツコエ10遺跡出土資料の整理・分析をハバロフスク地方郷土誌博物館で行い、ノヴォトロイツコエ10遺跡については成果の取りまとめを行い研究報告書として刊行した。結果として、両遺跡は約13,000年前に位置付けることができ、比較的近接した内容を持つことが明らかとなった。これにより、研究課題遂行の基礎となる確実な遺跡データの整備を行うことができた。

長岡市立科学博物館所蔵の新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡および室谷洞窟遺跡出土資料の整理・分析については、これまでに集めたデータの整理・分析を進めた。

(2) 2017年度は、昨年度に引き続き基礎資料の整理と分析など、研究課題の解明に向けた基礎作業をさらに進めた。具体的には、2001年に日露共同発掘を行った、アムール川下流域のゴンチャルカ1遺跡出土資料の整理・分析をハバロフスク地方郷土誌博物館で行い、成果を取りまとめ研究報告書として刊行した。その結果、本遺跡をこれまでに分析、研究報告書を刊行したオシノヴァヤレーチカ10遺跡、ノヴォトロイツコエ10遺跡と同様に約13,000年前に位置付けることができた。一方で、遺跡間で出土遺物の内容に異なる特徴があることも見出すことができた。資料の蓄積が進んだことで、研究課題遂行の基礎となる確実な遺跡データ整備を行うことができた。長岡市立科学博物館所蔵の新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡および室谷洞窟遺跡出土資料の整理・分析を継続した。本年度は特に出土石器の器種分類結果の整理と、船底形石器と呼ばれてきた石器の再検討を中心に整理・分析を進め、成果を研究論文として公表した。

(3) 2018年度は、基礎資料の整理と分析など上記課題の解明に向けた基礎作業を進行するとともに、これまでの研究成果の統合と評価を行った。具体的には、2015年に日露共同発掘を行った、アムール川下流域のオシノヴァヤレーチカ10遺跡出土資料の整理・分析をハバロフスク地方郷土誌博物館で行い、得られた成果を取りまとめた研究報告書を刊行した。併せて2002年、2005年に実施した調査についてもデータの整理、分析を進め、概要を報告書に掲載した。結果として、2015年から2018年度までに計4冊の研究報告書を刊行することで、日露共同調査の成果に基づく考古誌の整備を完了することができた。これまでに扱ってきた長岡市立科

学博物館所蔵の新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡資料の分析を継続したのに加え、新潟県立歴史博物館所蔵資料の整理・分析を行った。特に、新潟県立歴史博物館所蔵資料については、分析の成果を研究論文として公表した。日本列島、アムール川下流域を含めたより広範囲での当該期の比較検討については、2018年度中に完了することはできなかったが、関係者間で協議と基礎的な検討を続け、2019年5月に日本考古学協会においてセッション「環日本海北部地域における土器出現期」を開催し、北海道、アムール下流域、アムール中流域、中国北東部、関連する年代、土器について情報の共有と、地域間の共通性と個性の抽出の機会を設けることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

橋詰 潤、新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土石器の再検討(2) いわゆる舟底形石器と両面加工石器からの剥片石器素材の供給の検討、長岡市立科学博物館研究報告、53、査読無、2018、pp.99-118

橋詰 潤、両面加工尖頭器に残された痕跡とライフヒストリー、岩宿フォーラム/シンポジウム 大形尖頭器の技術組織 岩宿時代社会の終焉を探る、査読無、2018、pp.23-30

橋詰 潤、星野洋治コレクションの再検討(1):小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土石器について、新潟県立歴史博物館研究紀要、20、査読無、2019、pp.95-108

橋詰 潤、最終氷期末の両面加工刺突具の変遷について、第20回長野県旧石器文化研究交流会/シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?、査読有、2018、pp.26-30

橋詰 潤、広原遺跡群第I遺跡における黒曜石をめぐる人類の行動、資源環境と人類、8、査読有、2018、pp.53-66

Shimada, K., Yoshida, A., Hashizume, J., Ono, A., Human responses to climate change on obsidian source exploitation during the Upper Paleolithic in the Central Highlands, central Japan., Quaternary International, 442, 査読有、2017、pp.12-22

橋詰 潤、2016年の歴史学会 回顧と展望 考古一 旧石器時代、史学雑誌、126-5、査読無、2017、pp.609-614

橋詰 潤、考古学とジオパーク活動を結ぶ」特集：人のくらしと地球(ジオ)をつなぐ試み 考古学とジオパーク活動の連携、考古学ジャーナル、703、査読無、2017、pp.3-5

橋詰 潤、考古学とジオパーク活動の連携：ジオパークセッションの概要と特集「考古学とジオパーク」の趣旨、資源環境と人類、7、査読有、2017、pp.51-59

Yoshida A., Kudo Y., Shimada K., Hashizume J., Ono A. 2016、Impact of landscape changes on obsidian exploitation since the Paleolithic in the central highland of Japan, Vegetation History and Archaeobotany, 25、査読有、2016、pp.45-55

小野 昭・島田和高・橋詰 潤・吉田明弘、オーストラリア・北チロル地方の中石器時代遺跡群と高山景観の巡見調査、資源環境と人類、6、査読有、2016、pp.87-97

〔学会発表〕(計 13 件)

橋詰 潤・I. Shevkomud・内田和典・長沼正樹・國木田大・M. Gorshkov、ゴンチャルカ 1 遺跡 (2001 年) 発掘調査の成果と課題 アムール川下流の初期新石器時代オシポフカ文化の研究 (3) 、日本考古学協会第 84 回総会ポスターセッション、2018

橋詰 潤、新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土石器の再検討、日本旧石器学会第 16 回研究発表・シンポジウムポスターセッション、2018

橋詰 潤、小瀬ヶ沢洞窟遺跡および室谷洞窟遺跡下層出土石器の再検討、新潟県考古学会第 30 回大会研究発表会、2018

橋詰 潤、両面加工尖頭器に残された痕跡とライフヒストリー、岩宿フォーラム / シンポジウム 大形尖頭器の技術組織 岩宿時代社会の終焉を探る 、2018

橋詰 潤、最終氷期末の両面加工刺突具の変遷について、第 20 回長野県旧石器文化研究交流会 / シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?、2018

橋詰 潤、長和町広原遺跡群の概要と中部高地で黒曜石を巡る人類行動、長野県立歴史館考古学セミナー：先史時代における黒曜石利用について考える 旧石器時代を中心に 、2017

橋詰 潤、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003 年, 2004 年) 調査の概要：アムール川下流域における更新世末期の環境変動と人類行動の研究、2016 年度明治大学黒曜石研究センター研究集会、2017

Hashizume, J., Human activity in and around obsidian sources: A case study from the Hirropara site I, Central Highlands of Japan. COLS International Workshop 2017: Palaeoenvironment and lithic raw material acquisition during MIS2 and early MIS1: a comparative perspective、2017

橋詰 潤・I. Shevkomud・内田和典・M. Gorshkov・長沼正樹、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡における調査の成果と課題 - アムール川下流域の初期新石器時代オシポフカ文化の研究 (2) - 、日本考古学協会第 83 回総会ポスターセッション、2017

橋詰 潤・シェフコムード I. Ya.・内田和典・長沼正樹、ロシア連邦アムール川下流域における土器出現期の研究 基準資料作成に向けた日露共同調査遺跡の検討 、日本旧石器学会第 15 回研究発表・シンポジウム、2017

Hashizume, J., Transition in the use of stone axes during the Terminal Pleistocene of Central Japan. Session T10F: Tools and traces: microwear and residues in hunter-gatherer societies, WAC-8 Kyoto. Kyoto, Japan、2016.

橋詰 潤・隅田祥光・土屋美穂、長野県長和町広原 I 遺跡における黒曜石をめぐる人類活動、日本第四紀学会 2016 年大会、2016

Hashizume, J., Shevkomud, I. Ya., Uchida, K., The oldest pottery culture complex in the lower Amur River basin, Russia: a case study from the excavations at the

Oshinovaya rechika 10 site., The 8th Meeting of the Asian Paleolithic Association.  
Tokyo, Japan, 2016.

〔図書〕(計5件)

橋詰 潤・シェフコムード I.Ya.・内田和典・加藤博文・長沼正樹編、新潟県立歴史博物館、更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vol. 4: オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 (2015年) 発掘調査報告書、2019、130p. + PL.1-20

小野 昭・島田和高・隅田祥光・中村由克・橋詰 潤・吉田明弘、雄山閣、人類と資源環境のダイナミクス1 旧石器時代、2018、256p.

橋詰 潤・シェフコムード I.Ya.・内田和典・長沼正樹編、明治大学黒耀石研究センター、更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vol. 3: ゴンチャルカ 1 遺跡 (2001年) 発掘調査報告書、2018、104p. + PL.1-22

小野 昭・堤 隆・橋詰 潤・池山史華、南牧村教育委員会、氷河期からのたより: 野辺山高原に生きた旧石器のハンターたち、2018、24p.

橋詰 潤・シェフコムード I.Ya.・内田和典・長沼正樹・松本 拓編、明治大学黒耀石研究センター、更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vol. 2: ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003-2004年) 発掘調査報告書、2017、98p. + PL.1-13

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 内田 和典

ローマ字氏名: UCHIDA Kazunori

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。